（要約版）

日本酒の製造工程における文書化の役割に関する文化人類学的研究

助成研究者　岩谷　洋史（神戸大学国際人間科学部）

1. 目的

現在の日本酒製造（以下、「酒造り」と記す）において、注目すべきことは、作業者ら（酒造りの世界では、「蔵人」と呼ばれる）による書いたり、記したり、描いたりといったさまざまな書記行為と、それらによって生み出される諸産物（文書類）を現場で見る、読む、理解するといったことである。このような書記行為やそれにもたらされる文書類、およびその利用を、本研究活動では「文書化」（documentation）として位置付けたい

上記で定義される文書化に関わるものは、酒造りの現場においては数多くあるが、特に本研究においては、酒造りにおいて用いられる原材料や発酵状態に関する情報を記録する「経過簿」と呼ばれる、ある定まった様式の文書類に焦点を当てたい。これらの起源は、近代的な酒造りが始まる明治期まで遡ることができると思われる。近代的な酒造りが進展するにつれて、文書化も徐々に進展していくと考えられる。歴史的な系譜を辿りつつ、今日の酒造りにおける文書化の特性を把握し、酒造りの実践全体のなかでの意義を、民族誌的調査を通じて理解していく。

2. 研究方法

具体的には、以下の方法をとって上記の課題を探究した。

（1）関連する文献資料・文書資料の閲覧による情報収集

酒造りの製造工程に関わる学術書、解説書、教科書などの関連する文献資料のうち、特に筆者がこれまでの研究活動で触れていなかった明治期から昭和初期までに発刊された文献資料から情報の収集を行った。そして、酒蔵での酒造り工程の記録に関わる文書資料のうち、明治期から昭和初期までの酒造りの「仕込み帳」「経過簿」（以下、まとめて「経過簿」と記す）を対象に情報の収集に努めた。

（2）酒造りの関係者へのインタビュー

文書化に関して、技術者、経営者、現役の蔵人らと話をする機会に情報を収集した。特に、元杜氏（1 名）を対象に集中的に半構造化インタビューを重ねて、文書化に関する情報の収集に努めた。

（3）民族誌的調査による文書化の全体的な把握

これまでの筆者の研究活動で得られた知見を再確認するために中小規模の酒蔵で民族誌的調査を行った。改めて、酒造りの現場で行なわれている様々な書記行為の実践に注目し、そのやり方、作成される文書類の種類、それら文書の利用方法の把握に努めた。

3. 結果

酒造りは、大きく麹を製造する工程、酒母を製造する工程、醪を製造する工程に分けられる。各々の工程には各々の工程に対応した「経過簿」があり、上記の研究方法から、それらの様式、記録の方法、および、酒造りでの利用のなされ方を検討した。

明治期以降の酒造りは、酒税制度に大きな影響を受けているが、「経過簿」の存在や様式も少なからずその影響を受けていると推測される。そのあり方は時代ごとに異なっていることが確認できる。

明治期終わりからは、品温の変化の数値が書き込まれるような様式のものが現れる。さらには昭和期以降では、品温の変化が折れ線グラフを用いて表されるようなものが現れる。明治期以前は不明であるが、明治期以降では、温度の変化が酒造りで最も重要な指標と捉えられる。それが単なる数値表記から、それだけでなく図示的表記も加えられることになる。

ここには、「経過簿」が酒造りを記録する役割をもつ以外に、現在の酒造りにおける「経過簿」と同じような、それ自体を管理するものへと変化していったことが見て取れる。ただし、現在の酒造り現場を見た場合、麹製造、酒母製造、醪製造での経過簿の利用方法は異なる。麹製造での経過簿では、麹の状態を記録するという意味合いが強いが、酒母や醪の製造では記録だけでなく、製造そのものを管理するための資源としての役割を担うことになる。とりわけ、醪の製造では、品温だけでなく、第二次世界大戦後から BMD 値（留後の日数×その日のボーメ度）の変化も管理のために重要な項目とみなされるようになり、その値の変化を示すグラフが描かれるようになる。

現在の酒造りの現場においては、書記行為、およびその行為による文書類を参照すること自体、作業者にとっては酒造りの工程を進めさせるための作業なのである。文書類は、酒造りの現場から持ち出すことが可能になるという意味で空間的にも、そして、文書類から過去の酒造りの基本は理解しえ、それらは次の酒造期間に役立つだけでなく、次の世代の人たちにも伝えることができるようになるという意味で時間的にも移動可能である。そういう意味で、それらがその現場での実践の文脈から離れたものと見えなくもない。

しかし、文書化は、酒造りの実践の一部でもあると同時に、酒造りの実践それ自体を構成する。さらには、その酒造りの実践を場合によっては変えていくこともありうる。このことは簡潔に言えば、文書化は酒造りの実践のなかに埋め込まれたものである、ということが言える。少なくとも、現在の酒造りでは、数値を操作したり、その数値が記載された文書を扱ったりする技能が必要となるだろう。文書化は酒造りの技術の一つとして構成されているのである。